

日本天文学会公開講演会

埼玉発天空行 地上と宇宙をつなぐ天文学の歴史

埼玉県には、理化学研究所や旧国立天文台堂平観測所など、長く日本の天文学を支えてきた研究施設があります。これらの研究施設や大学が積み上げてきた観測天文学研究の歴史や、現在の大型望遠鏡/衛星のプロジェクト、そこで明らかになってきたさまざまな宇宙の謎を紹介いたします。

牧島一夫 (東京大学 教授)

「宇宙空間から宇宙を見る」

宇宙から来るX線は、大気で吸収され地上に届きません。しかしロケット、人工衛星、宇宙ステーションなどに装置を乗せ、大気圏を抜けて宇宙空間に出ると、ブラックホール、超新星の残骸、中性子星などが、強いX線を出しているのが見えて来ます。この講演では、埼玉県和光市に本拠地をもつ理化学研究所が推進してきた研究や、ご当地・埼玉大学が参加している計画も含めて、宇宙空間から見た宇宙の姿をお伝えしましょう。

川端弘治 (広島大学 准教授)

「さいたまから、そしてハワイから宇宙を見る」

人類は広大な宇宙を知るべく、より大きな光学望遠鏡を建設する努力を重ねてきました。2020年代にはTMTなど、すばる望遠鏡の8mをゆうに上回る次世代超大型望遠鏡の実現も見込まれています。一方で、その経緯や突発的な現象の連携観測などで、小型の望遠鏡も重要な役割を果たしています。埼玉大の新望遠鏡への期待、そして秩父地方にある堂平観測所(現 堂平天文台 星と緑の創造センター)での経験も交えながら、日本における光赤外線天文学の進展と今後についてお話をしたいと思います。

河野孝太郎 (東京大学 教授)

「南米アタカマから宇宙を見る」

私が子供の頃の遊び場だった稲荷山から出土した鉄剣は、一見、ありふれたもののようにみえましたが、X線で金象嵌の銘文が発見され、古代史の謎を解く重要な手掛かりとなりました。一見、なんでもないような空も、サブミリ波で観測すると、遠い過去の宇宙における巨大銀河の誕生と進化の謎を解く重要な手掛かりが見えてきます。南米アタカマ砂漠で観測を開始したアルマによる最新画像とともに、宇宙における古代史の謎に迫ります。

埼玉から、世界各地そして宇宙から迫る最新の宇宙の姿について、ぜひお楽しみください。

主催：日本天文学会

後援：埼玉大学、埼玉大学科学教育センターCST事務局、埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、さいたま市桜区、朝日新聞社さいたま総局、テレビ埼玉、FM NACK5、誠文堂新光社天文ガイド、ピクセン